

九

どんな小さな家でも、その家で生れた子供にとつては、それが一つの大きな世界に見えぬものはないその不思議、其の秘密は、漸々に現はれて来るものである。そしてまた、ごく貧乏な小屋でも少くとも屋根裏部屋位はある。其處へ行くのに一つの木の梯子が懸つてゐる、子供はどんな感じを以つて初めてこの梯子を登る事だらう。實に、此處に載つてゐる二三の古い道具、もう役にも立たなくなつて永い永い間忘れられてゐるこの道具、過ぎ去つて昔を回顧し、今はもう最後の骨まで腐つてしまつたその昔の人々をまた思ひ起させる。煙突の後側には、大抵は蟲の喰つた木製の箱があるものだ。これが、また、大に好奇心をそゝるのである。箱の上には、塵埃が手の厚み程にも積んでゐて、まだ箱には鍵前はついてゐるが、しかし誰でも中のものを出すのに合鍵はいらない。何故なら、何處からでもお好み次第に手

を入れて、中のものを掴み出す事が出来るから。子供は震えながら、こはく／＼に手をその中に入れると中からポロ／＼になつた長靴や、糸車の竿の壞れたのなどを引張り出す。もうこんなものは半世紀も前に片附けられてしまつたものであるが。この二つの發見したものをちつと見てゐて、ふと思はず「この靴をはいた足は今何處に！」この糸車の竿をまはした手は今何處に！」と考へ出すとさあ子供は怖くなつて、身震ひしながら之を投り出す。しかし、母親は、それやこれやをまた丹念に仕舞つて置く、何か紐の要る時には、この祖父の靴の紐をきり取るために、またこの曾祖母の糸捲竿は、何か焚付けでも要る時の用意にと。しかし、また、よし、去年の冬のひどい寒さに、皆が仕方なく／＼乾いた堆肥まで燃やさなければならなかつた時に、この箱も遂にストーブの中に移住してしまつたとしても、屋根にはまだ、錆びた手鎌が残つてゐる。この鎌も、嘗つては

ピカ／＼と輝いて、威勢よく野に引かれ。幾千の黄金色の縁濃い莖を、たゞ一息に薙ぎ倒した事もある。また、手鎌の上方には、物凄いな鎌が大鎌が懸つてゐる、昔この大鎌のために、家僕が鼻を削がれてしまつた、餘り上り口に近く懸つてゐたのと、その僕がひどく急いで梯子を登つたために。片脇にある一つの隅からは、鼠が出没する、二三匹が穴から飛び出して来る、そしてしばらく舞踏をしてから、またコソ／＼と引込んで行く。否、それ所か、光る様に白い鼯鼠が覗きつゝ偵ひつゝ惻憐そうな小さな頭を前足ごと高く舉げてゐる。また、何處か氣のつかない隙間から差し込んだ、たつた一本の光線は、全く黄金の絲の様で、誰でも之を指に捲きつけたいと思ふ程である。

穴倉と云ふものは、小屋住ひにはないが、大低の且那株の家にはある。それも葡萄酒を藏まつて置く様なものではない迄も、馬鈴薯とか燕とかを入れて置く位はある。貧乏人の家では、斯う云ふものは戸外に相當な土饅頭を造つて、その中に隠して置き、秋になると堀り出し、冬時ことに霜のひどい時には、土の上を一層用心深く藁とか腐つた枯草などで覆ふ

穴倉に這入る事は、屋根部屋に登るよりも、一層氣をつけなければならぬ。さりとて、また、或は此の或はこの方法で、は入つて見たい云ふその熱望を、満足させない様な子供が何處にあらうか！子供は、例へば隣へ行き、もし其處の女中が丁度穴倉へ行く用があると云へば、甘へながら前掛にブラ下つて、望を達する。或は、忘れて戸が閉めずにあると云ふ様な時には、かう云ふ隙をねらつて、子供は自分の手腕で這入る、しかし自分一人で勝手に這入る事は勿論危険な事である、幾時急に戸が締められるかもしれないから。そしてまた穴倉の中はと見ると、十六足の蜘蛛が、胸の悪くなる様な無恰好な姿で、壁を這ひ回つてゐる。或は、ジメ／＼と渣んで漏つて来る青みが、かゝつた水が、故意とらしく残つてゐる凹みへ集まつて居る。到底永くこの中には居られない。然し、これは何の事か、恐れるにはあたらぬ。人は誰でも喉は持ち合せてゐるではないか、本式に大聲出して叫べば、つひには人に開かれて、助けは来る！

家に於てさへ、如何なる事情の許にも、子供にかゝる印象を與へるとすれば、ましてやその住める土地は子供には如何に思はれる事であらうか！初めて

母親に、又は父親に伴はれて、曲りくねつた町の通りを歩む時、驚異の念をおこさずには居られない。めまぐるしい感じなしではゐられない。

否、恐らくは、この時に事物の永遠の模形を持つて家に歸るのである。永遠と云ふ譯は即ち、次第に大きくなるに従つてこの、最初の事物の印象が打ち壊されると云ふよりも、寧ろ氣の付かぬ間に無限に擴がつて行つて、よし後からの印象が如何に立ち勝つて居やうとも、すべて之等のものに對抗して實に破壊され難いものを形づくるからである。さればこそ、私にとつて、あの美しい夏の時、日曜日や祭日によく母がした夕方の散歩の折に、初めて連れ行つてもらつた時の事は、今日も尙忘れがたく、あり／＼と心に残つてゐるのである。あゝ、何とあのウエツセルブレンは大きかつた事であらう！五歳の子供の足は、まだ町を廻りきらぬ中にもう殆んど疲れてしまつた。また、途中で何と多くの事に遭遇した事だらう！既に町や廣場の名前が私には謎の様に不思議に響いたではないか！「今はロールフツスへ来た。」此處はブランケンアウだ。「今クリングベルクを歩いてゐる。」「あそこはアイヘンネストだ。」など

と云ふ、名前の根據がなければならぬに、ますます神祕が隠れてゐると云ふ事が確かに思はれる、名前だけでさへ、既に、かくの如くであるから、事物は尙更神祕に思はれたのである。教會——其處のオルガンの音や合唱の聲はよく聽いて居たが——墓地墓地に付きものの茂つた樹木や十字架や墓石——極めて古い家——三十年戦争の頃に、住んだもの（當時より二百年位以前の事、その穴倉の中には悪魔に護られてゐる寶が藏つてあると云はれてゐる——）一つの大きな魚池。凡べてこの個々のものが、私の心には、恰も、かの巨大な動物の肢體の様に、互に有機的に結合し、またそれが實に一つの驚くべき全體に融けあひ流れ合つて來た。このすべての上を秋の月が青白い光をそそぎかけて居るのであつた。私は其後、ローマの聖、ペテロ寺院や、又あのドイツの大伽藍を見た。また、私は、ペレ、ラシャイゼを、セスチウスのピラミッドを併ふた事もあつた。しかし、私が、教會とか墓地とか云ふものを考へる時には、幾時でも、あの初めて母につれられて散歩した晩に見たあの姿をそのまゝあり／＼と思ひ浮べるのである。